



TITLE:

東南アジア・ドライゾーンの地域形成と発展 - コラート高原を中心として -

AUTHOR(S):

池本, 幸生; 福井, 捷朗; 河野, 泰之; 永田, 好克; 上田, 曜子

CITATION:

池本, 幸生 ...[et al]. 東南アジア・ドライゾーンの地域形成と発展 - コラート高原を中心として -. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 20: 55-61

ISSUE DATE:

1996-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187593>

RIGHT:

東南アジア・ドライゾーンの地域形成と 発展ーコラート高原を中心としてー

1. 研究組織

研究代表者：池本 幸生（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

研究分担者：福井 捷朗（京都大学東南アジア研究センター・教授）

河野 泰之（京都大学東南アジア研究センター・助手）

永田 好克（京都大学東南アジア研究センター・助手）

上田 曜子（流通科学大学商学部・講師）

2. 研究のねらい・目的

本研究の目的は東南アジア各地に見られるドライゾーンの発展の共通性と特殊性を検討することによって、ドライゾーンの発展の固有性とコラート高原の発展の特殊性を明らかにすることにある。東南アジア各地に見られるドライゾーンは、かつては「自給自足経済」が想定するよりはるかに人と財と情報の交流が盛んに行われてネットワークが形成され、文明の栄えた「先進地域」であった。このようなドライゾーンの持つ特徴は、市場経済化、工業化を通じて開発から取り残された「後進地域」「貧困地域」と見なされるようになった現在も、この地域の経済発展のパターンに固有性を与えている。

本研究の特徴は、このように国を単位とした経済発展を考えるのではなく、ドライゾーンという生態環境に基づく地域を対象とし、経済史的な長期的視点から発展の固有性に迫ろうとするところにある。

3. 平成7年度の研究経過

本研究は福井捷朗主催の「東南アジアにおける平原半乾燥地の比較研究」と合同で行っている。

この研究会の国内メンバーは以下の通り（池本班のメンバーは除く）。

足立 明（北海道大学文学部）

伊藤 利勝（愛知大学文学部）

加納 啓良（東京大学東洋文化研究所）

桜井由躬雄（東京大学大学院人文社会研究科）

田村 克己（国立民族学博物館）

中村 尚司（龍谷大学経済学部）

新田 栄治（鹿児島大学教養部）

桃木 至朗（大阪大学文学部）

第1回研究会

日時：1995年7月10日

場所：京都大学東南アジア研究センター

内容：研究打ち合わせ

第2回研究会

日時：1995年12月5日

場所：京都大学東南アジア研究センター

内容：鹿児島大学の新田栄治氏を迎えて、考古学的視点からコラート高原のかつての「先進性」とそれを裏付ける資料などについてお話いただき、議論した。

第3回研究会

日時：1995年12月9・10日

場所：宮崎市

内容：原班、福井班との合同研究会。池本班からは河野氏が東北タイの研究手法として個別村落調査に基づく研究を越えるべきことが提案された。具体的には、永田氏が現在行っている東北タイの村落データベースの地図化の作業を利用して、東北タイ全体の変化の様子をどの程度明らかにしうるかを示した。研究会での反応は、そのような地図は初めての試みでもあり、また利用価値も高く、できれば白黒ではなくカラーで印刷することが望ましいというものであった。

第4回研究会

日時：1996年2月20日

場所：京都大学東南アジア研究センター

内容：ビルマ農村の変容

報告者 高橋 昭雄（アジア経済研究所）

討論者 水野 広祐（アジア経済研究所）

報告内容は高橋氏が1987年と1995年に行ったビルマ農村の調査に基づき近年のビルマ政府の開放政策が農村にどのような影響をもたらしているのかということであった。開放化によって人々の生活は改善しているが、格差という面からは様々な局面で格差が拡大していることが指摘された。

報告後、ドライゾーンの比較という観点から討議が行われ、ビルマ農村の経済・社会の成り立ちなどに関して討議が行われた。

4. 研究の成果とフロンティア

基本的課題

本研究との関連において基本的課題となるのは、（a）「平原半乾燥地」がかつて核心域を形成していたときには現在とは全く違った東南アジアを形成していたことを示すこと、（b）その変容過程における現代の核心域との間の力学、（c）かつてドライゾーンが核心域であったということを説明する要因を明らかにすることである。そのためにも、「半乾燥地」「東南アジア世界」「周辺的地域」といった概念を明確にしておく必要がある（林行夫）。ドライゾーン（半乾燥地）とは、東南アジアを山地、平原、海岸に3区分したときの平原に当たる。地域の水文環境には気候条件と地形条件がともに関連するが、その平原が相対的乾燥地となる必然性についてはなお十分に検討を重ねていく必要がある（福井捷朗）。

考古学的アプローチ

東北タイではかつて製塩、製鉄が広く分布していたが、これらの産業は森林破壊という意味で生態的にも意味が大きかったと思われるが、この地の気候条件と製塩、製鉄を直接関連させる論理を検討しなおす必要がある（新田栄治）。

コラート高原の経済史的課題

コラート高原の経済史的時代変遷を人口と食糧のアンバランスから生じる交易、国家成立後の税の徴収に関連する財の流れと王室貿易によるそのさらなる拡大、中部タイでの米作拡大によるその衰退、工業化によるさらなる衰退と見ることができよう。この仮説はコラート高原の財の流れから見た経済構造を分析していくことで検証することができよう。

コラート高原の現代的課題

東北タイは、水不足、干ばつ地域とされ、それが貧困の根本原因であると考えられやすいが、

はたして事実かどうかは慎重に検討する必要がある。ドライゾーンの興亡という観点から眺めたとき、別の要因が明らかになってくるだろう(Srisak Vallibothom)。

他地域との比較

・ジャワ

「サバナ植生」を指標とすれば、ジャワは東端を除き該当しない。「半乾燥地」としたとしても、ジャワ、上ビルマの河川灌漑地域と溜池・天水地域とをサブグループとして分けた方がよい(加納啓良)。

・上ビルマ

下ビルマの開発によって上ビルマの相対的地位が下がったかもしれないが、ビルマに関しては、乾燥地から湿潤地域への核心域の転移は、他地域ほど明確ではない(田村克己)。

上ビルマの畑作、特に棉作がタイ、南ベトナム、中国との関連で18世紀以前のピュー史も含めたビルマ史において重要な位置を占めたことを検討することは意味のあることである(伊東利勝)。

・スリランカ

灌漑農業が過剰開発を結果する。スリランカのドライゾーン灌漑の衰退がそうであるし、今日のデカン高原でも同じ傾向が見られる(中村尚司)。

スリランカの乾燥地が周辺的な地域として転落した後、近代に入り過去のシンハラ文明の再興というイメージで作り上げられてきた灌漑による開発過程に注目している。(足立明)

村落データベースの地図化

地域像を理解するためには、典型的な対象地に対する詳細な調査も必要であるとともに、典型的な対象地の相対的な位置を描き出す、より広範な地域の調査も重要である。従来、この後者の広範な調査については、調査技術の問題から十分には取り組まれてこなかった。

永田が現在取り組んでいる、タイ国東北部を対象にした NETVIS (Northeast Thailand Village Information System)は、タイ国政府が隔年で行っている村落レベルの総合的社会経済調査である村落基礎データ調査の結果を、GIS (Geographic Information System) の手法を用いて視覚化するものである。タイ国における経済発展が目覚しくなった1980年代後半からのデータを表現することができ、一例として経済発展の浸透度についての地域内差異を読み取ることができる。NETVISの出力データ集を来年度早々にも成果報告書シリーズとして準備する予定である。

NETVIS出力見本

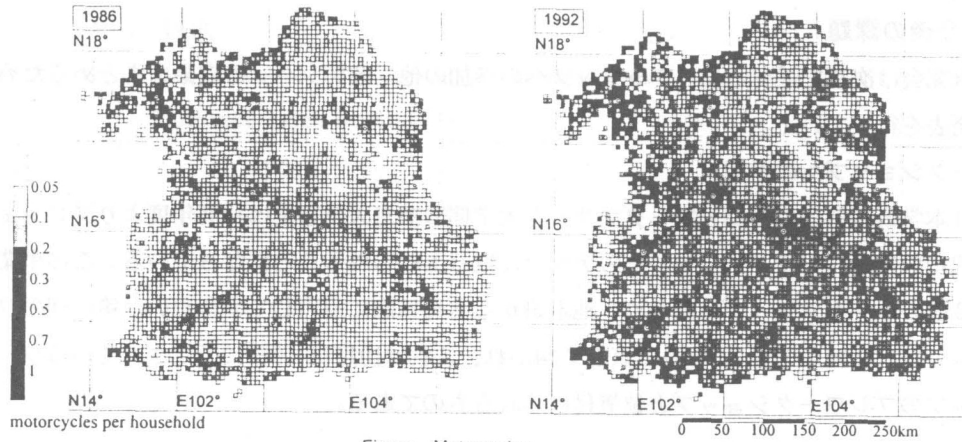


Figure Motorcycles

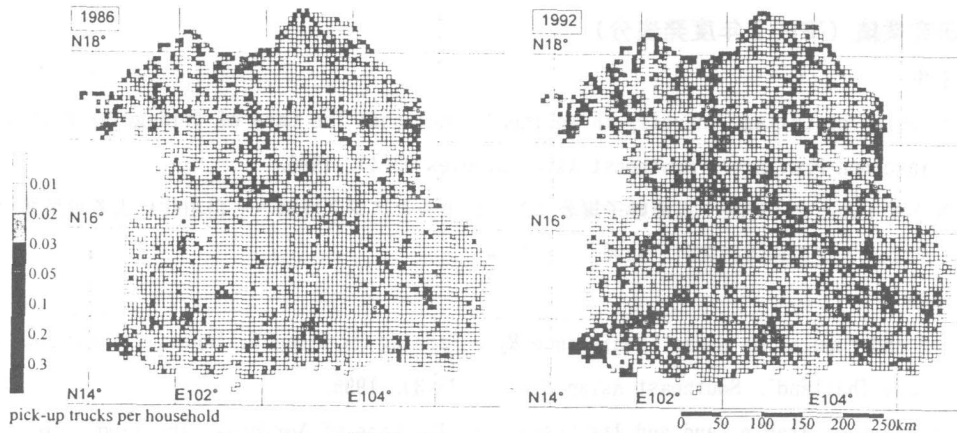


Figure Pick-up Trucks

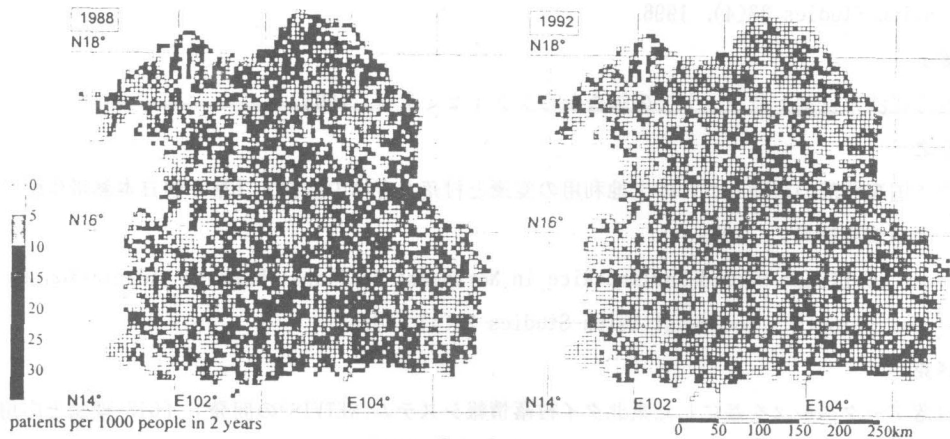


Figure Dysentery

5. 今後の課題

研究会は次項で述べるワークショップへの参加の他、各メンバーの成果をまとめるための研究発表を行っていく。

ワークショップへの参加

日本学術振興会の京都大学－タマサート大学間の拠点大学事業は1996年度よりプロジェクト方式に転換し、ドライゾーンがそのテーマに取り上げられることになっている。この事業により2回のワークショップが開かれ、池本班からも積極的に協力していきたい。第一回のワークショップは1996年6月3-4日に京都で開かれ、これは10月14-16日に予定されているワークショップのプレワークショップと位置付けられるものである。

6. 研究業績（平成7年度発表分）

池本幸生

"Expansion of Cottage Industry in Northeast Thailand: The Case of Triangular Pillow in Yasothon Province", Southeast Asian Studies 33(4), 1996.

「NAFTAとタイ経済」谷浦妙子編著『NAFTAとアジア経済 — 自由化による地域統合への対応』アジア経済研究所, 1996.

福井捷朗

"Food and Population under Subsistence Rice Farming in Three Villages in Yasothon, North east Thailand", Southeast Asian Studies 33(3), 1996.

"Expansion of Arable Land and Its Cessation: The Case of Northeast Thailand", Southeast Asian Studies 33(4), 1996.

上田曜子

「地方経済の役割：コラートでの調査から」タイセミナー, 1995.

河野泰之

「タイ国東北部の村落レベルの土地利用の変遷と村落共有林の役割」『第5回日本熱帯生態学会大会講演要旨集』, 1995.

"Spread of Direct Seeded Lowland Rice in Northeast Thailand: Farmers' Adaptation to Economic Growth", Southeast Asian Studies 33(4), 1996.

永田好克

「村落データベースを基にした東北タイ村落情報システム(NETVIS)の開発」『GIS-理論と応用』

Vol. 4 No. 1, 1996.

"Mapping the Village Database: The Spread of Economic Growth to Rural Areas of Northeast Thailand", Southeast Asian Studies 33(4), 1996.